

ダンテとピンチョンにおける歴史と「見る」こと

アウエルバッハの『神曲』論から『V』を読み直す

石割 隆喜

ピンチョンを論じるとき、ダンテとの比較が有効であることは先行研究により示されている。『重力の虹』は「百科全書的なナラティブ」であるという重要なジャンル論的指摘がなされたとき、「小説」ではないとされたこの作品は『ガルガンチュアとパンタグリユエル』『ドン・キホーテ』『ファウスト』『白鯨』『ユリシーズ』などからなる系譜に連なることとなったが、その始点に位置するのが『神曲』であった (Mendelson 161)。本発表は、『V』を論じるときにもやはりダンテとの比較が有効であることを示そうとするものである。ポストモダニズム小説とミメシスという問題を考える際に、近代の黎明期にイタリア俗語で書かれたダンテの詩との比較という手法が、パラノイア的な歴史叙述を行う小説である『V』の場合にはとりわけ有効であることを、『ミメシス』におけるアウエルバッハの『神曲』論を介して示したい。

アウエルバッハは『地獄篇』第10歌を論じながら、ダンテがファリナータ・デリ・ウベルティとカヴァルカンテ・カヴァルカンティという二人の地獄の住人たちをそれぞれに異なる個性を持つ個人として描いていることに注目し、そこにダンテのリアリズムの“the astounding paradox”——この世での個人の歴史、“changing and developing”を本質とする歴史をあの世という“changeless” (Auerbach 191) な場に持ち込むというパラドックス——を見出す。アウエルバッハは、地上で歴史的に生きられた『神曲』の亡者たちの生と、あの世で顕になるその者たちの固有の本性との間に、“figure/fulfillment”の関係を見て取る。すなわち、生前のファリナータとカヴァルカンテは「与表」であり、地獄の第6圏でダンテが目にして居るのは、同じ異端者でありながらもそれぞれに異なる彼ら固有の人間性の「実現」された姿なのである。このときに重要なのは、与表と実現がどちらも“actual historical events and phenomena” (Auerbach 197) としての性質を備えていることである。“[T]he overwhelming realism of Dante’s beyond”は、実現の場としてのあの世が“a stage for human beings and human passions” (Auerbach 197, 201) として機能していることに由来するのである。

アウエルバッハは、ダンテのリアリズム、すなわち“realism projected into changeless eternity”を基礎づけるのはどのような歴史観なのかという問題をずっと考えてきたという。彼によれば、ダンテは歴史を単にこの世的なプロセスとしては見ておらず、歴史を構成するこの世の出来事はすべて不断に神の計画と関連し、神の計画というゴールへと向かうものであると見ている。これは、千年王国の到来という未来へと向かう水平的な前進運動を行うのみならず、この世の出来事と現象は「常に」 (“at all times”) 神の計画と「垂直的」 (“vertical”) に直接つながっているということの意味する。なぜなら万物は神の積極的な愛の“emanation”であり、神の愛は「無時間的」 (“timeless”) かつ「あらゆる時期を通じて」 (“at all seasons”) すべての現象に働きかけるからである (Auerbach 194)。

アウエルバッハが指摘する、歴史を神の計画の「放射」と捉えるダンテのこの歴史観が、『神曲』と『V』をつなぐものである。『V』の主人公の一人ハーバート・ステンシルは、イギリス外務省のエージェントであった亡き父の日記に記されていた“*There is more behind and inside V. than any of us had suspected. Not who, but what: what is she?*”という一節を読んで以来、このイニシャルがVである謎の女性が、ファシオダ危機や南西アフリカでの原住民の反乱といった“the surface accidents of history”を束ねる“the ultimate Plot Which Has No Name”の“symptom” (Pynchon 53, 155, 226, 386) であるとの妄想にとらわれるようになる。このステンシルの陰謀史観が「ヘーゲル主義的」と呼べるものであることを発表者は以前アルチュセールに依拠しながら指摘した。すなわち、「名前なきたくらみ」とファシオダ危機やVとの間には全体と部分という関係、言い換えれば内的本質 (=全体) の表出としての外的現象という因果関係が成立していると見なすことができる。この内的本質/外的現象という関係が「あらゆるところであらゆる瞬間に」 (“everywhere and at every moment”) 成立しているならば、その場合、前提として全体は「精神」としての性格を持つことになるが、自らの表出となるよう部分に効果を及ぼすこのような全体のモデルは、『精神現象学』の著者ヘーゲルの思想の中に典型的に見出すことができる (石割 140-41)。これを踏まえれば、ダンテにおける歴史は神の計画の放射であるとのアウエルバッハの指摘は、ダンテの歴史観がステンシルの陰謀史観と同じく表出的因果性——全体すなわち内的本質であり精神としての神の計画と、その表出 (=外的現象) としてのこの世の歴史——に基づいていることの指摘にほかならない。ダンテの歴史は、どの瞬間どの場所でもヘーゲル的「精神」としての「たくらみ」の表出であるステンシルの歴史と同型なのである。

ステンシルの歴史とダンテの歴史が同型であることからまず見えてくるのは、ステンシルの歴史の宗教性である。もちろん、ステンシルが妄想の中で作り上げる「たくらみ」は神の計画ではない。したがってこの場合の「宗

教」とは、神の計画の位置していた地点に神のものではないがやはり「計画」が存在し、生とは逆向きの力の発現の場である数々の歴史的な事件もまたやはりその「計画」の直接的な働きかけを「垂直」に受けているという、神が不在でありながらダンテのキリスト教的歴史観との形式的な同一性を示しているという意味での括弧付きの「宗教」である。

アウエルバッハは、神の審判により個々の魂がそれぞれ個別の永遠の境遇を与えられて初めて、それぞれの魂の“individual form”が「目に見えるようになる」(“revealed it to sight”)と論じる (Auerbach 192)。ステンシルの歴史とダンテの歴史が同型であることから浮かび上がるもう一つのは、この「見る」ということと関係する。アウエルバッハはダンテ論を“we are given to see, in the realm of timeless being, the history of man’s inner life and unfolding”(Auerbach 202)と締め括る。歴史をくっきりと際立たせる舞台としてあの世が機能しているダンテのパラドキシカルなミメシスが「見る」と関係することが、結論として述べられるのである。

ここで「見る」ことができるようになってるのは歴史的存在たる人間一人ひとりの個別性(個=性)だが、ではピンチョンにおいて、「名前なきたくらみ」の「放射」すなわち表出である歴史的諸現象はその個別性をくっきりと「見る」ことができるものとなっているだろうか。エジプトやフィレンツェ、パリや南西アフリカ、そしてマルタ島を舞台とする「偶発事件」は、表面上は他とは異なる固有の原因により起こった現象としてそれぞれに個別性を有しているように見えながら、みな等しくVに付き従われている。すなわち「表面的な偶然」としての歴史的出来事は、Vにより同質化され、個別性を失っているのである。Vの遍歴の地がみな“Karl Baedeker”(Pynchon 408)により記述されているという同じ特徴を持つことも個別性の喪失に寄与している。ステンシルの探求においてすべては「ステンシル化」(“Stencilized”)されるが (Pynchon 228)、それは歴史的出来事から個別性を奪い見えなくすることであり、これが「ステンシル化」というミメシスすなわち歴史の再現の特徴なのである。

この個別性の消失は、言うまでもなく、Vその人により顕著に見て取ることができる。イニシャルがVの女性たちは、ヴィクトリアやヴェラといった異なる名前を与えられている限りではそれぞれに個別性を有しているように見えながら、その個別性は陰謀の「徴候」という共通の属性により相殺され、力を失う。彼女らの特徴づけるのは個性という違いではなく、同じ一つの性質であり意味の反復なのである。それだけでなく、それら見かけ上の個別性は、彼女らが年齢、身体的特徴、そして所持品から実は同一人物であるとされるに及び、決定的に解消される。ではVは一人の人間として、ダンテの地獄の住人のように「変化と展開」すなわち歴史を持っているかといえば、「歴史」によりくっきりと浮かび上がるはずの彼女の固有の本性は、ステンシルにとっては究極のところ不明なままである。なぜならVがステンシルの母親であるかどうかだけでなく、彼女が父のマルタ島での死とどのように関わっているのかもまた、小説の結末に至っても彼にはわからないからである。“Private eye”(Pynchon 131)に比せられるステンシルにとって、Vは「誰、ではなく、何。彼女は何なのか」と父の日記にあるとおりのまま、すなわち何者であるかわからない謎のままであり続けるのである。

あの世を舞台に歴史的存在たる人間一人ひとりの個別性が「目に見えるようになる」というアウエルバッハの『神曲』論を経由したとき、『V』は歴史を「見る」ことの不可能性を突きつけてくる小説として、われわれにその姿を現す。ダンテとピンチョンにおける「見る」ことのこの対照的なあり方(ピンチョンにおいては、“private eye”の“eye”は「見えない」と同時に「見ようとしなさい」目でもある)は、先に指摘した、ダンテの歴史とステンシルの歴史が同型であることからくるステンシルの歴史の宗教性に関係している。なぜならダンテにおいて、神の審判は個々の魂の「この世的な個性」を実現するものであったのに対し、ステンシルの「名前なき陰謀」にはそのような審判を下す設計者はいないからである。「見る」ことをさせないステンシルの「宗教」は、ダンテのキリスト教神学の裏返しと見なすことができるだろう。アウエルバッハを介して『V』を『神曲』と比較することで見えてくるのは、『V』のミメシスにおいて歴史を「見る」ことが問題と化しているということである。『V』におけるパラノイア的な歴史観は、ダンテの歴史の再現が達成した「見る」ことのそうした変容——「見る」ことへの不信と疑念——を指し示しているのである。

引用文献

- Auerbach, Erich. *Mimesis: The Representation of Reality in Western Literature*. Translated by Willard R. Trask, introduction by Edward W. Said, fiftieth-anniversary ed., Princeton UP, 2003.
- Mendelson, Edward. “Gravity’s Encyclopedia.” *Mindful Pleasures: Essays on Thomas Pynchon*, edited by George Levine and David Leverenz, Little, Brown, 1976, pp. 161–95.
- Pynchon, Thomas. *V. J. B. Lippincott*, 1963.
- 石割隆喜「ヘーゲル主義者、Stencil——Vの他者」『英文学研究』81, 2005, pp. 137–50. *J-Stage*, https://doi.org/10.20759/elsjp.81.0_137.